
館 - The pictures was taken by fantastic girl -

夜桜 野鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想写真館 - The pictures was taken
by fantastic girl -

【Nコード】

N2332Y

【作者名】

夜桜 野鈴

【あらすじ】

新人ルポライター芥川春樹。彼はひよんな意思で失われた里、『幻想郷』に神隠しされてしまう。

そんな中、彼は様々な幻想郷の暮らしを知り、写真に納めいつしか彼の過ごした夏は人生でかけがえのない思い出となっていく。平和な幻想郷を漫遊した男のルポルタージュ。

あの夏は暑かった。

今年の夏は暑かった気がする。

自己紹介から始めようか。

僕の名前は芥川春樹。ルポカメラマンとして今年の春に大手出版社に就職した大学上がりの22才だ。

自分のデスクの引き出しを開け、封筒に入った数十枚の写真の束を取り出す。

その写真に写っていたのは色とりどりの光の中を舞う少女たちだった。

そう、これを撮った去年の夏も暑かった。

平成22年6月下旬。

梅雨が明けてすぐ、蝉はけたたましく鳴き始め、陽射しは真夏の色を帯びた。

大学最後の年となった僕は、某県の山に風景写真を撮りに登っていた。

舗装された山道は、既に完成していて美としての追求性を僕は感じる事ができない。あえて獣道を進み、その先にある何かを撮ることを僕はよく行っていた。

この日もそうだった。しかし、いつもと違い、自分の意思と言うよりは、『誰かに呼ばれた』ような気がしてふらふらと獣道のほうへ入っていったのだ。

ほぼ無意識だったと思う。気がついたら、屋根も落ち、瓦は割れ、雑草は茫々と繁り、蜘蛛の巣は太く張り巡らされた廃社に辿り着いた。

「美しい……」

僕はそこに底知れぬ美を感じた。共感されることはないだろう。しかし、自分の感性に大きな衝撃を与えたのだ。

僕は夢中でシャツターを切った。

「もしこれが過去の栄華を取り戻したらどれだけ素晴らしいだろうか……」

言っただけで違和感を感じた。風が変わったのだ。

この世からは絶滅してしまった風。

僕は思わず振り向く。

光景にシャツターを切ることも忘れていた。

割れて歩き難いであろう石階段はキレイに整頓され、朽ち折れていた元の色も分からぬ鳥居は、朱に塗られ荘厳に聳えていた。

違和感よりも己がふと口にした言葉が真になったことに僕は戦慄した。

もう一度振り返り返り社のほうを見れば、草は萎まれ、瓦は整列し、蜘蛛の巣一つ無くなっていった。

空の色も澄み、喧騒さえない。微かに聞こえる遠くの声は騒がしいのではなく活気の音だ。

「あら……また外の人？」

にしてはまだパニックになってないのね。冷静なのかしら。

それとも鈍いだけ？」

後ろから少女らしき声が聞こえる。

どうやら階段を上ってきたらしい。

「僕はどちらかと言えば鈍い人間ですよ」

本日三度目の振り返りの前に居たのは、ノースリーブの巫女服という、なんとも前衛的なファッションの少女だった。見た目的には16、7だろうか。

夏ということもあり、露出の多い仕様になっているのだと思うが、健康的な汗を浮かべる肌には目のやり場に困る。

「なるほどね。じゃあ端的に言うわここはこの世であってこの世でない。」

あなたは神隠しに遇いました」

「……………予想はしてたから驚かない、かな」

己の言葉が現実になった時点で粗方の整理は頭の中で着いていた。「なら話は早いわね。」

夏で良かったわ、紫も冬眠してないからすぐに変えられると思う」「簡単に帰れるんだ……………」

拍子抜け。

小説などの展開では『〜』が終わるまで帰れません』なんて設定があるけど流石は現実。やれそうなことが出来なくて、出来なさそうなことがやれる。

「その人帰るつもりはないと思うわ」

どこからか声が聞こえる。

「こちらよ。芥川さん」

足下が裂け派手な服装をした少女　　と言えば少女だが、雰囲気がおば……………妙齢の女性と言うのが当て嵌まる少女がぬつと現れた。

「どうということ、紫？」

この人が帰るためのキーパンソンの紫さんか……………。

「そんなことより僕の名前何で知ってるんですか？」

日傘を虚空から取り出して開く。もう神隠しに遇った時点で大抵の驚かないが、不思議には思う。

「二人の問いには両方一言で答えることが出来るわ。」

何故なら、私が呼んだからよ」

僕は内心「ああ、なるほど」と思っていた。廃社まで言ったときの変な感覚は気のせいでは無かったのか。

「芥川さん……………だっけ？ あんた何一人で納得してんのよ。」

面倒だからもつと端的に説明して頂戴」

「私は彼の意味を尊重したの。好奇心ではなくて、清潔さをもった写真への想いを汲み取っただけよ」

つまり僕は、写真への想いで紫さんの気を引く 紫さんの何らかの手助けで神隠し、という状況だということか。

「帰るのはいいけど、彼の意思は力強くて……。彼の意思に反する時、私の境界は効果を為さないみたい。」

数100人に1人の確率で存在するから珍しいことじゃないんだけどね

「ああもう！ 紫の言ってることまどろっこしいわ。」

要は彼が心から帰りたいたいと思えば帰れるのね？」

そういうこと、と紫さんが返す。

「正直、僕は帰る気ないですよ。ここの美しさを撮るまでは」

その発言をした瞬間場が凍った。真夏なのに。

「うふふ、貴方やっぱり面白いわ」

「ここまでくると鈍感な罰せられるべきだと思つた」

なにか失敗したことは伝わった。何を失敗したのかは理解できないけど。

「という訳で霊夢、貴女危険な場所で撮影するときは護衛してあげなさい」

「嫌よ、死にたきゃ勝手に死ねばいいわ」

それでも巫女なのか……。

「駄目、私は芥川さんが気に入ったの。他の妖怪たちに食べられたりしたら悲しいわ」

「そこまで言うなら紫がすれば良いじゃない」

「それも駄目。私はやることがあるの」

「何よ？」

「お昼寝」

霊夢が払い棒で一閃するがそれよりも早く地面に境界を作り逃げ込んだ。

「冗談よ。芥川さんの荷物取りに行くのよ」

あ、そういうえば替えのフィルムも少ししか持ってない。

「というか、僕の自宅分かるんですか!？」

「あ、初めて感嘆符付きで驚いた」と、霊夢。

「そこは驚くのね。」

「分からないわ。だから住所教えてくれるかしら？」

「外の世界の住所なんて分からないんじゃない……」

「大丈夫よ、Googleがあるんだから」

「紫さんは現代にも居るようだ。もし帰ったらネットカフェでも覗こう。紫さん居るかも。」

「紫さんに住所を教えると境界を閉じて地面は何事も無かったかのようになっちゃった。」

「霊夢さん、で良いんですよね？」

「霊夢で良いわよ」

「じゃあ霊夢。ここはなんて名前の里なんですか？」

「ここは『幻想郷』。人と人でない者の共存する失われた里よ」

「失われた……」

「そう、空想の生き物は居ないけど、幻想の生き物、つまりは妖怪なんかの失われた生き物は外の世界にいないけど此方側にいる」

「じゃあ紫さんも？」

「紫はもつと特別。幻想郷が隔離される時から居て、幻想郷の隔離計画に一役かってる古参中の古参だから」

「幻想郷っていつ頃隔離されたんですか？」

「明治時代って言われてるわ」

「明治 と考えると歳は……」

「あまり考えないほうが良いわ。噂では創世記時代から生きてるのか。」

「冗談だと思うけど」

「妖怪というより神の領域なんじゃない……」。

「ところで、住むところ無いわよね？」

「あ……はい」

「しょうがないわね」

「神社に住まわせてくれるんですか？」

「あんだ変態？ 男と女が一つや屋根の下なんてそんなふしだらな真似を神職の私がするとも！？」

男女七歳にして席を同じうせず！」

ものすつごく顔を赤らめて否定された。

「知り合いに男がいるからそこに止めてもらいなさい。どうせ暇だろつし」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2332y/>

幻想写真館 - The pictures was taken by fantastic girl -

2011年11月5日03時10分発行